

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第94号

2011

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成24年3月21日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条1項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	韓 雯（中国）
学位の種類	博士（人文学）
学位記番号	甲第94号
学位授与の日付	平成24年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	日中古典詩歌における「梅」のイメージ比較
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 西田 禎元 文学研究科教授 委員 藁谷 隆純 文学研究科教授 委員 水谷 誠 文学研究科教授

2012年1月10日

博士論文審査および最終試験報告書（課程博士）

主査	西田 禎元	文学研究科教授
委員	藁谷 隆純	文学研究科教授
委員	水谷 誠	文学研究科教授

博士（人文学）学位請求論文提出者

氏名： 韓 雯（ハン・ウエン）（女）

生年月日： 1983年12月11日（28歳）

論文題目 日中古典詩歌における「梅」のイメージ比較

I. 論文内容の要旨

本論文は、学位請求者の、日中両国の文学に重要な位置を占める「梅」を対象とし、漢詩と和歌における梅のイメージの対比についての研究成果をまとめたものであり、全体の構成は以下のとおりであるが、＜序章＞等を含めて3部14章と末尾の＜表＞から成る、35万字（本文・表）におよぶ長編である。

序 章

- 1 研究目的及び方法
- 2 先行研究
- 3 研究内容及び範囲

第1部 漢詩と和歌における「梅」のイメージ比較

第1章 漢詩における梅のイメージ

- 1 漢代
- 2 六朝時代（発生期）
- 3 唐代（発展期）
- 4 宋代（高潮期）
- 5 宋代以降——元明清

第2章 和歌における梅のイメージ

- 1 奈良期における梅のイメージ
- 2 平安朝における梅のイメージ
- 3 中世、近世の梅

第3章 日中梅のイメージ比較

1 日中梅のイメージの共通点

2 日中梅のイメージの相違点

第2部 梅のテーマの日中比較

第4章 梅が香

1 「梅が香」は、いつ詠まれるようになったのか

2 漢詩における「梅が香」

3 和歌における「梅が香」

4 結語

第5章 梅が枝

1 漢詩と和歌における「梅が枝」の表現

2 漢詩と和歌における「梅の折り枝」

第6章 梅と雪

1 序・詩歌における景物の取り合わせ

2 梅雪の見立て

3 梅と雪の見まがう

4 雪が梅を引き立てる

5 結語

第7章 梅と柳

1 漢詩における柳のイメージ

2 漢詩に見える「梅と柳」の取り合わせ

3 和歌における「梅と柳」の取り合わせ

4 結語

第8章 梅に鶯

1 序

2 『万葉集』に見える「梅に鶯」

3 平安朝和歌に見える「梅に鶯」の変容

4 民間に定着

5 漢詩に見える梅と鶯

6 中国の民俗における「梅に鶯」

7 結語

第3部 梅の典拠の日中比較

第9章 「梅花落」——「詩紀落梅乃篇」再考

1 序

2 「落梅乃篇」とは何か

3 「落梅乃篇」は総称か、特称か

4 楽曲「梅花落」の由来と「落梅」別称

5 楽府詩『梅花落』のイメージ

6 江総「梅花落」と梅花の宴

7	結語
第10章	「好文木」考——天神信仰の伝承を中心に
1	序
2	梅の異称「好文木」及びその出典
3	出典の信憑性について
4	天神と梅——飛梅伝説と渡唐天神
5	「好文木」説話の成立試考
6	結語
第11章	「松竹梅」——文学から民俗へ
1	序
2	中国における「歳寒三友」の成立——題画詩
3	日本での発展
4	日中「松竹梅」の差異及び原因
5	結語
補章	文学における植物のイメージが成立、変容の理由
1	自然要素
2	社会要素
3	文学要素
4	他の分野の影響
5	結語
終章	
	参考文献・表

なお、〈表〉の内容は、「六朝時代における詠梅詩」・『全唐詩』における詠梅詩・『万葉集』における梅の歌・「八代集における梅の歌」の4表で、それぞれの詩篇や歌の題名や部立て・作者・イメージなどを中心に、16～21項目毎に分類・整理されている。

<内容要旨>

本研究は、これまで十分に検討されてこなかった日中両国の詩歌における対比を、「梅」を対象として考察した比較文学・比較文化の論考である。

序章においては、本研究の目的・方法・範囲等について、主に六朝時代から宋代にいたる漢詩と、『万葉集』から〈八代集〉にいたる和歌を対象とした、両国の詩歌文学の比較という方法の意義を述べている。

本論の第1部では、「梅」のイメージをめぐって、3章にわたって、漢詩と和歌それぞれの特色と、両者のイメージ比較を共通と相違の両面から詳細に紹介し、検証を試みている。

第2部では、「梅」のテーマをめぐって、5章にわたって、〈梅が香〉・〈梅

が枝>・<見立て>・<取り合わせ>などの、題材と方法について検討を加え、興味深い考察も示している。

第1部・第2部とも各章のすべてにわたって、先行研究をふまえながらの詳細な論述である。

まず、総論として、中国の漢詩については、六朝期から宋代までの流れを視野に入れ、「梅」のイメージの成立・発展・変容ととらえ、六朝に顕著なく傷春>・<閨怨>のイメージが、唐代の<友情・郷愁・隠逸>などのイメージを経て、宋代の<君子の徳>に至るという論述は、歴史の推移という時間軸の比較対比をも包摂している。

また、日本の和歌については、『万葉集』と<八代集>を中心に、万葉集 → 古今和歌集 → 新古今和歌集の流れを、発生・発展・円熟ととらえ、『万葉集』の<梅花の宴>に代表される大陸文化の影響が、平安朝以降になると日本伝統の美意識を特徴とする、<優美>・<幽玄>などの美的理念をともなったイメージとして展開されるという論述は、和歌文学史の体裁をも示している。

更に、漢詩と和歌に共通するイメージとして、<春の喜び>・<落花の悲しみ>・<恋の情緒>などに言及している。

次に、各論としては、第2部のテーマ論において、<梅が香>・<梅が枝>・<景物の取り合わせ>といったテーマを取り上げ、中でも「梅」のイノチともいべき<薫香>については、漢詩における<清香>（六朝～唐）や<冷香>・<寒香>・<孤香>（唐～宋）や<幽香>・<仙香>・<天香>（宋代以降）などの多様なイメージに触れ、漢詩における<梅が香>の総括として、<暗香>であると論述する。

一方、日本の和歌においては、漢詩の<暗香>の影響と思われる<夜香>に注目し、総体的特徴として、<袖の香>・<薫物（たきもの）>などの<移り香>の美意識や<恋の情緒>について論述する。

また、<取り合わせ>については、天象の<雪>・植物の<柳>に触れたあとに、花鳥の取り合わせである<梅と鶯>論に及ぶ。

日本において<花札>にまで影を落としている<梅鶯>の取り合わせが、中国においては、花鳥詠・花鳥図は数多く見られるけれども、<梅の花>に取り合わされる<鳥>が、必ずしも<鶯>だけではない（たとえば、燕や鵲）といった特徴に言及している。

第2部までの論考が、従来の研究成果をふまえての分析と統合の体裁であるのに対して、第3部の典拠論には、新しい見解が強く反映されている。

第9章「梅花落」―「詩紀落梅乃篇」再考における論述では、『万葉集』巻第5、815番～846番の歌群（大伴旅人邸における<梅花の歌>）の序文に記されている「詩紀落梅乃篇」を取り上げ、この記述の「詩」について、『詩経』や古楽府の「梅花落」の詩作とする従来の説に対して、本論文では特定の詩ととらえ、その詩を『楽府詩集』に収録されている「梅花落」13首の江総作1首とす

る見解を新たに提示している。

この「梅花落」には、江総の詩篇が3首見られるが、その中の1首だけが、〈望郷〉や〈閨怨〉のテーマに代表される「梅花落」詩篇とは異なり、〈遊宴〉がテーマになっていると、その詩を明示している。

尤も、この指摘は、序文の当該記述が「請紀落梅乃篇」という写本もあり、本文の整定がなされていない現状においては、一試論でしかないが、詩歌相互の類似の内容・テーマと解した考察は、それなりに評価できる。

第10章「好文木」考における論述では、従来中国故事典拠説に対して、日本における〈天神信仰〉と〈五山文学〉の融合によって生み出された説話であると考察している。

第11章の「松竹梅」論では、日中両国のそれぞれにおける起源・発展・差異の原因などについて分析している。日本では縁起物として、中国では「歳寒三友」に代表される君子の美德として認識されていると論じ、更に日本では〈松〉、中国では〈梅〉が主役であると述べる。

補章では、植物のイメージにまでテーマを拡大し、中国における儒教の影響による〈比徳〉の理念と、日本における〈もののあはれ〉の美的理念の対比に触れている。

終章には、本論文の要旨が簡潔に記されており、論文全体の結論が示されているというわけではない。本論の幾つかの章には、〈結語〉として章毎の結論は示されていた。

II. 論文審査の要旨

審査委員は、本論文を精読し、以下のように評価した。

研究の対象と方法が妥当であり、日中比較文学としての成果が認められる。

先行研究をはじめ多くの資料を検討して導いた論述であり、その緻密性・独自性は本論文の最たる特色である。

末尾に掲げた〈表〉も苦心の作であり、後学の徒にとって大いなる参考資料になる。

〈課題〉

総じて本論文は高い評価であるが、不備な点もいくつかある。

たとえば、五山文学に影響を及ぼした中国漢詩の状況も検討されなければならないだろうし、表記（部・章のタイトルなど）の一貫性に欠けている点や、記述の初歩的なミス（目次と本文中のタイトルの違い・歌集の巻の勘違いなど）や誤解（和歌詠み人の思い違い、『万葉集』792番歌 大伴家持 → 藤原久須麻呂・同1426番歌 詠み人知らず → 山部赤人・『古今和歌集』46番歌 紀貫之 → 詠み人知らず、など）があり、正されなければならない。また日本

語表現の誤用などもままた見られるが、外国人の日本語であることを思えば、この点は大きな過誤ではない。

何よりも、日本文化に対する習熟度は同世代の日本人以上であり、審査委員すべてに共通する驚嘆であった。

広げ深めることができなかつた問題等を今後の課題として、ますますの研鑽が深まることを期待したい。

Ⅲ. 最終試験の結果

学位請求者は 2008 年 6 月に中国南開大学大学院博士前期課程を修了、2009 年 9 月創価大学大学院博士後期課程文学研究科人文学専攻（日本文学日本語学専修）に入学、現在同課程の 3 年生である。

南開大学大学院博士前期課程修了時に執筆した修士学位論文「秋乃七草論」が、第 1 回中国日本学研究「カシオ杯」優秀修士論文賞二等賞受賞（2008 年 10 月）・『中国日本学研究優秀修士論文「カシオ杯」受賞論文集』＜北京日本学研究センター＞に収録（2009 年 7 月）といった業績をはじめとして、2011 年 3 月には「日中松竹梅の比較研究」（『日本語日本文学』第 21 号、創価大学日本語日本文学会）が掲載され、この 3 月にも、「好文木——「天神信仰とのかかわり」（『日本語日本文学』第 22 号、創価大学日本語日本文学会）が掲載決定となっている。

また、2008 年 11 月（創価大学日本語日本文学会）・2009 年 9 月（和漢比較文学会）・2011 年 5 月（宋代詩文研究会大会）・同年 8 月（日中韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム）等において、修士学位論文や本論文で取り上げたテーマ関連の論考について、口頭発表を行っている。

本論文は、公開発表会および最終試験において、いくつかの問題点や課題が提起されたが、学位請求者は概ね明快な対恵であった。今後は中国の母校で教育や更なる研究に携わるようである。創価大学大学院出身の文学博士が中国の学生や大学院生に日本の言語と文化を教導するありようを、日中交流の希望の架け橋として大いに期待したい。

論文審査および最終試験 ともに「合格」で、本論文は博士（人文学）の学位を授与するに値するものと認定する。